



令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

学校名【 武豊町立富貴小学校1 】

1 実践テーマ	【 III・V 】
2 実施対象者	4年生 88名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 教科名 (体育) ② 行事名 () ③ その他 () <p>(2) 地域における活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	<p>◇本年度開催された東京オリパラ大会を契機に、人々が障がいの有無に関係なく、一人ひとりが生き生きと輝き、力強く生き抜くことのできる共生社会づくりの実現に貢献できる人材育成を目指す。</p> <p>◇障がい者スポーツを体験することで、スポーツに対する興味関心を高めるとともに、障がい者理解の推進に努める。</p>
5 取組内容	<p>◇障がい者スポーツ体験と講演</p> <p>(1) パラバドミントン体験</p> <p>2020 東京パラリンピックパラバドミントン日本代表の伊藤則子選手を講師として招聘し、競技のルール等の説明とともに、教師とのデモンストレーション及び子どもたちとのラリーを行った。</p>  <p>(2) 講師による講演</p> <p>講師の生い立ちに沿って、障がいと向き合って過ごしてきた小学生時代の気持ちやその後の人生観、障がい者スポーツとの出会いなど、パワーポイントを活用し、分かりやすくお話をいただいた。</p> <p>また、質疑応答の際には、パラ競技に打ち込む動機やメダル獲得の際に感じた想いについて質問する場面が見られた。</p> 

6 主な成果	<p>◇本年度開催された東京パラ大会に出場し、銅メダルを獲得した選手を間近に見たり、コミュニケーションを図ったりすることで、障がい者スポーツに関する興味関心が高まるとともに、障がい者理解について考えるきっかけとなった。</p> <p>◇一流選手に触れることで、競技技術はもちろん、競技に向かう姿勢等のすごさを目の当たりにし、希望や勇気をいただいた。</p> <p>◇障がい者スポーツ体験を通して、障がいの有無に関係なく、一人ひとりにとって過ごしやすい共生社会づくりについて考えるきっかけとなった。</p> <p>◇総合的な学習の時間に実施予定の福祉実践教室にもつながるいい機会となった。</p> <p>◇自国開催のため、子どもたちの関心が高い中の実施となり、より身近なこととして取り組めた。</p>
7 実践において工夫した点(事業の特色)	<p>◇一流の選手を講師として招聘したこと。</p> <p>◇障がい者スポーツ体験と講話をセットで行ったこと。</p> <p>◇一人ひとりの児童が講師とより多くの時間を共有できるように学年全体で実施せず、学級ごとに三部制で実施したこと。</p> <p>◇講師と教師の対戦を取り入れることで、子どもたちの関心を高めたこと。</p> <p>◇本事業を学校行事や教育課程において関連性をもたせて実施したこと。</p>
8 主な課題等	<p>◇当該学年から他学年・保護者・地域への発信する機会を設けることで、体験した児童の学びを確かなものにするとともに、多くの人たちに、オリパラ教育の意義について、周知していく必要があると考える。</p> <p>◇座学とスポーツ体験をセットで行うことが、活動をより充実させることになると考える。</p> <p>◇教員には異動があるため、この取り組みのねらいを組織として共有し、想いや情熱をつないでいく必要がある。</p> <p>◇しっかりと教育課程の中に組み込んで、学校教育全体で共生社会づくりの実現に向けた人材育成計画を推進していくことが大切である。</p> <p>◇本物に触れる機会の確保については、人材とともに費用負担が生じるため、事業実施に向けた予算確保が必要である。また、リモート開催も費用負担軽減につながるが、人と人が直接関わることの意義はとても重要だと考える。したがって、国や地方自治体がオリパラ教育のもつ意義を理解し、予算要望していく必要性を感じる。</p>
9 来年度以降の実施予定	<p>◇東京オリパラ大会は終わったが、オリパラ教育は、ここがスタート地点と考え、推進校として取り組んだことをきっかけとして、継続的な取り組みをしていきたい。具体的には、本校はもちろん、町内小中学校及び知多地方の小中学校への普及推進に努めたい。</p> <p>◇社会に開かれた教育課程として、地域教育力を有効活用し、関連大学との連携を図り、オリパラ教育のさらなる推進と発展に努めていきたい。</p> <p>◇オリパラ教育を推進する教員の育成にも努めていきたい。</p>

令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

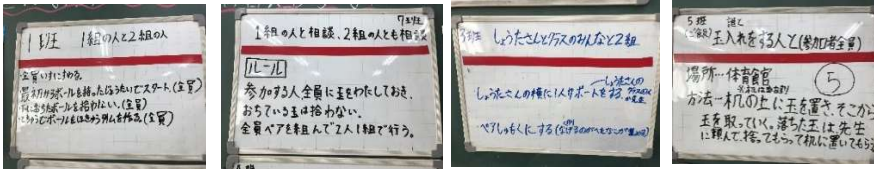

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

学校名【 武豊町立富貴小学校2 】

1 実践テーマ	【 Ⅲ 】
2 実施対象者	第6学年（1組） 29名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（ 道徳科 ） ② 行事名（ ） ③ その他（ ） (2) 地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 （ねらい）	◇障がいがある人もない人も一緒にスポーツを楽しむことができるように、どのような工夫ができるかを考えることで、パラリンピックを象徴する価値（「勇気」「強い意志」「公平」「インスピレーション」）のうち、特に「公平」について理解する。 ◇「みんなが楽しめる」について考える際、みんなの中に自分を含めて考えさせることにより、「公平なルールづくり」について当事者意識をもたせて考えさせる。
5 取組内容	◇授業前半は、原市紘奈さんのドッジボール大会での思い出を例に「みんなが楽しめる」ことについて考えた。周囲が障がいのある児童に対して、配慮したルールにしたつもりでも、配慮される本人の気持ちとすれ違いが起こる可能性があることを確認した。 ◇そこから児童は特別ルール等を決める際には、配慮する本人の意思を確認したり、気持ちを共有したりすることが大切であることに気付いた。 ◇授業後半は、紘奈さんの例を生かし、車いすの児童がいる中で玉入れ競争について、「誰とどのようなルールを決めれば、みんなが楽しく競い合えるかな？」という課題でグループワークを行った。 ◇授業終盤ではそれぞれのグループから出てきたルールを全体で共有し、話し合う場面を設けた。
6 主な成果	◇今回、「公平」について考えたことは、児童が日常でも生かせるようなテーマだったと感じる。また、障がいがある人に対して支援を行う際、何よりもまず当事者の気持ちを聞いたり、意見を尊重したりすることの大切さは、本時を通して共有できた部分であったと感じる。



<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>◇グループワークを行う前に、「さっきの紘奈さんの話と似た感じだけど、まずどんなことをしなければいけないかな？」と問いかけると、「しょうたさんの気持ちを聞く」とスムーズに児童から出てきた。そこで 'ImPOSSIBLE のテキストとして用意されている「しょうたさんが苦手なこと」「しょうたさんの意見」を提示し、しょうたさんの状況や意思を確認させた上でグループワークをスタートさせた。グループワークを行ったことで、それぞれのグループが積極的に話し合う様子が見られた。</p> <p>◇児童から出た共通する考えに対して、「なぜ、しょうたさんのクラスではない2組とも話し合うの？」と問うことで、「しょうたさんの発言にあるから」や「しょうたさんだけが不公平だと思われるから」という多様な意見を引き出した。</p> <p>◇しょうたさんに全員が合わせるルールが多く出される中、「本当にそれで自分も楽しいの？」と切り返し発問をすることで、「自らも楽しむためには？」という視点に焦点を当てて考えさせた。これにより、さまざまな方法で「みんなが楽しめるルール」を考え、公平について考えを深めていく様子が見られた。</p> 
<p>8 主な課題等</p>	<p>◇課題として感じたのは、日常生活において児童が障がい者と関わった経験が圧倒的に不足している点である。具体的には、しょうた君に対してのルールを考えているとき、健常者が障がい者に対して「〇〇してあげなければならない」という固定観念があるがゆえ、「自分たちは我慢してもしょうた君に合わせなければ」という思考又はルールづくりになったのだと感じる。</p> <p>◇健常者が障がい者に対して配慮することは必要なことではあるが、それがいつも配慮される側の気持ちを満たすとは限らない。また、「みんなが楽しめる」とは、突き詰めれば「持続可能であるか」と問われているようなものだと授業をしながら感じた。</p> <p>◇「公平」「平等」、そして「共生」等のテーマについては、日頃から児童に投げかけたり、さまざまな人々と交流させたりすることで少しずつ理解が深まっていくものなのだと思う。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>◇本校としては、引き続き、オリパラ教材である 'ImPOSSIBLE を有効活用し、実施学年の拡大を図ってきたい。</p> <p>◇今回は、道徳科の授業実践となったが、体育はもちろん、総合的な学習の時間等とのつながりを意識した取り組みに発展させていきたい。</p> <p>◇教材学習と実技体験をセットで行うことで、子どもたちにより考えさせることのできる授業づくりに取り組んでいきたい。</p> 



令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

学校名【 武豊町立富貴小学校3 】

1 実践テーマ	【 I・III 】
2 実施対象者	武豊町内小中学校
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（ 道徳・保健体育 ） ② 行事名（ ） ③ その他（ ） (2) 地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 (ねらい)	◇愛知県オリパラ教育推進校として、自校の実践のみならず、武豊町内の小中学校に I'mPOSSIBLE を活用したオリパラ教育の実践を推奨し、その普及と発展を図る。
5 取組内容	◇中学校での実践例 【ねらい】 パラリンピックの意義、歴史、競技などについての知識を学び、パラリンピックの価値を通して共生社会を実現するための意識を高める。 【授業の流れと様子】 前時に「1-1パラリンピックってなんだろう？」を実施し、意識づけを行った。授業の終わりに「東京2020パラリンピック競技大会をきっかけに、社会はどのように変わっていくか」を考えさせ、「東京2020パラリンピックのレガシーについて考えてみよう！」の授業へとつなげた。 ◇小学校での実践例 【ねらい】 パラリンピックで活躍する選手や競技の映像を見て、パラリンピックを身近に感じ、興味をもつ。 「失ったもの」ではなく「今あるもの」を最大限に生かし、努力を重ねる選手達の姿に触れることで、自分の力を信じて力強く生きていこうとする思いをもたせる。 周りの人の良さを認め合いながら、互いに助け合って生きていこうとする意欲をもたせる。 【授業の様子】 導入で試合の映像を見せたり、香西選手の映像を見せた。香西選手の映像を見て、障がいの有無に関係なく、一人の人として尊敬の念を抱いていた。 自分の生き方を考える場面では、ワークシートを活用し、香西選手の生き方から自分の生き方を見つめ直し、考えることができていた。

<p>6 主な成果</p>	<p>◇中学校の実践から パラリンピックや共生社会について興味関心が高まった。 【生徒1】 障がい者施設の観察をしたい。点字ブロックの周りにいたり、上に乗ったりしないようにしたい。 【生徒2】 レガシーがもっと広まっていろんな障がいのある人が生活しやすい社会になったらよいなと思った。 【生徒3】 LGBTや障がい者の人に優しい社会、共生社会にできるよう一般の人の意見だけでなく、さまざまな人の意見を聞くことが大切だと思った。</p>  <p>授業を終えたアンケートでは、約9割の生徒が次のパラリンピックは観たいと答えた。</p> <p>◇小学校の実践から ワークシートからは、児童がパラリンピックに興味をもち、これからの自分の生き方を考える様子が見えた。香西選手の生き方から困難に打ち勝ち、強い意志をもって自分の目標に向かっていきたいという思いをもつことができた児童が多かった。</p> 
<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>◇中学校の実践から 単発ではなく、つながりのある授業実践をすることで、パラリンピアンが、『障がい者の方の意識を変えたい』や、『社会を変えたい』など、メダルを取ることに以外にも目標を持っていることを知ることから入ることで、パラリンピックの意義につなげることができた。</p> <p>◇小学校の実践から 他の選手の映像のQRコードをワークシートに載せておいたところ、授業中だけでなく休み時間も意欲的に見る児童も多かった。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>◇中学校の実践から 今回のImPOSSIBLE（オリパラ教材）を活用した授業は、東京2020パラリンピックが開催されてすぐだったので、生徒には浸透しやすかったが、少し間があき、熱が冷めたときでも生徒の心を揺さぶるような教材の工夫だったり、パラリンピアンの方のお話を直接聞いたり、パラスポーツを一緒に取り組む機会がより効果的な活動になると考える。</p> <p>◇小学校の実践から 香西選手との境遇が違いすぎることで、障がいに対する想像力の欠如などから、自分事として考えることが難しかった児童もいた。体験的な活動を取り入れると、より自分事として考え、より学びが深まったと考える。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>◇ゼロベースだった武豊町にとって、本年度の各校1実践がスタートとなった。引き続き、オリパラ教育の推進と発展を目指して、各校での実践を拡大するとともに、学校教育において、共生社会の実現に向けた人材育成の一助としていきたい。</p>